

【74期】近 祐次郎(こん ゆうじろう)



私は平成21年10月より、小池隆夫北海道大学第二内科教授および小野江和則北海道大学名誉教授の御推薦を受け英国セントトーマス病院レイン研究所ループスリサーチユニットに留学させていただきました。少々早くの帰国となりましたが留学先での臨床経験および基礎研究、そして英国での生活の経験を生かして、今後も臨床・研究を続けていきたいと思っておりますので皆様どうぞよろしく願います。さて、私の留学の目的ですが、遺伝子制御研究所で小野江先生、岩淵先生のご指導の下、NKT細胞の研究をさせていただき、基礎研究の「いろは」を教えてくださいました。

その後、臨床に戻り現在北海道リウマチ科内科病院院長の谷村先生の下では全くマウスから離れて関節リウマチの画像の研究を楽しくさせていただきました。

私はやはり臨床医ですのでこういった画像の研究を重ねて、臨床に直接役立つような研究がおもしろいと思っていましたので、その研究をずっと続けていくものと思っていました。しかし、小池隆夫先生、渥美達也先生に留学のチャンスをいただきまして、私の希望としては臨床に直接結びつくような研究をしたい、ヒトの検体をつかって直接病氣と向き合う研究をしたいというものでした。その希望がなかったような場所に行くことができ、本当に良かったと思います。

まずは英国の紹介ですが、当初は全英オープンテニスで有名なウィンブルドンに住むことにしました。ロンドン市内は多くの外国人が住んでいますが、ウィンブルドンはとても静かで住人も英国人がメインであり、夜でも大変治安のいい場所でした。ちょうど、セントトーマス病院のあるウォータールー駅へは約15分で到着しますし、3分おきにひっきりなしに、しかも英国人はゆとりのある状態でないと列車に乗ってきませんので静かに通勤を楽しむことができました。4月にアイスランドの噴火がありましたが、この時期ヨーロッパは大変過ごしやすい時期でしたので、ユーロスターに乗ってフランスやベルギーにも旅行をさせていただきました(噴火のためかなり予約しづらい状況でしたが)。気軽に土日を使って3泊4日の欧州旅行ができるのもこちらの施設にいられたからだと感謝し、一生懸命旅行しました(笑)。もちろん国際学会も欧州では盛んですのでイタリアでのヨーロッパリウマチ学会(EULAR)や、エジプトでの国際血栓止血学会などにも格安で気軽に行けるため、大変有意義でした。

研究室の紹介ですが、臨床面と研究面に分けてご紹介したいと思います。臨床面ですが、まず英国セントトーマス病院はナイチンゲールが所属していた病院として有名で、病院の地下にはナイチンゲール博物館もあります。歴史も長いので100年前の医療機械が私の普段通過する廊下に展示してあったり、研究会に使用する講堂は大変歴史を感じさせるような重厚な造りの建築物であったりと病院全体が博物館のようです。私は週に二回行われるループスユニットの回診に同行しています。ループスユニットの外来は独立していますが、病棟というのはありませんのでSLEであれば心疾患、呼吸器疾患、腎疾患、皮膚疾患などにわかれて入院されている病棟を回ることになります。主治医は1年目、2年目のレジデントと上級医師が担当し、指示だしなどはこの若い医師にゆだねられています。回診はループスユニットのConsultant(専門医)の3人の医師が持ち回りでおこなっており、緊急時の呼び出しにも対応しています。回診メンバーは薬剤師、看護師、レジデント(各国から)、担当医、Consultantからなっており、日本の回診と変わりません。外来患者の救急対応ですが、基本的には救急部のスタッフが夜間、休日の担当を行い、翌日以降に引き継ぎが行われます。



臨床面の理解のために少々話しがずれますが、英国の医師養成システムを紹介させてください。若い医師は2年間のレジデントの期間ののち、GP(General Practitioner; かかりつけ医)になるか専門医になるかを決めなくてはなりません。GPを希望するのであれば、初期研修のあと3年間のGPトレーニングが行われます。こちらは主に外来トレーニングとなるようです。皮膚疾患、腰痛、小児、産科などすべてのCommonな疾患および健康管理の知識および技術習得をしなくてはなりません。専門医を希望する場合、6年間の臨床研修が必要とされておりそのメンバーが病棟の上級医として活躍します。どちらも毎年試験があるので、その勉強が大変そうでした。研修医は当直の回数もかなりの数が割り当てられているようです。会議中もひっきりなしにポケットベルで呼び出しを受けていました。専門医としてはこの8年間が終わったのちに専門医の称号を得ることができます。これらはNHS(National Health Service; 英国の国民保険)のシステムの中で動いており、日本の学会単位での専門医取得とは大きく異なります。

臨床面の紹介に戻りますが、こちらの病院では外国からのレジデントも受け入れており、現在までにスペイン、ギリシャ、ブルガリア、ドイツ、メキシコ各国から若い医師が研修に訪れております。彼らの滞在は各国の臨床研修期間としてカウントされることもあり、また、母国の病院から給料ももらえるという恵まれた環境でもあり、3~6カ月ロンドン生活を楽しみながら研修している様はうらやましく感じられました。私も外来見学をしておりましたが、ループス外来をメインに抗リン脂質抗体症候群の妊娠外来や血管炎外来、腎外来などを見学し討論に参加させていただいています。治療は基本的にEULARの標準治療に合わせて行うというのが大前提です。しかし最終的には患者さんに副作用のある治療はしないという考えがもっとも大きく、当病院のConsultantは米国の治療法もよく知っておりますが、大変よい成績の治療でも副作用に問題がある治療法は使用しないという考えが反映されています。

さて、次に私のメインの仕事であります研究面ですが、当研究所はHughes Syndrome(抗リン脂質抗体症候群の別名)で有名なGraham Hughes教授が長年主催していましたが現在ではほぼ引退し、Khamashta先生が研究室を主催しております。実質、私のBossですが、彼は私がBossと呼ぶのを嫌がるため、友達ということになっています(笑)。他にもスタッフが多数いますが当研究室はかなりの多国籍部隊です。数年前のブレア首相による医師増加政策もあり英国は外国から沢山の医師を導入しました。私の研究室だけでもスペイン、アルゼンチン、イタリア、インドと世界中から集合しています。こちらの研究は臨床研究がメインであり、抗リン脂質抗体のプロフィールやSNPの検討など実際の患者さんの検体を使用しての研究が盛んです。患者さんのDNA、血清、血漿がそろっていますのでやる気次第でなんでもできる研究室だと思います。隣にはMRIの研究を中心とした放射線科がありますので、そちらに興味があればそこのコラボも可能でした。しかし、私が依頼された仕事は、ゼロからセットアップする作業に近い状態でした。私はやはり免疫に興味がありFACSでの解析を得意にしてみましたのでレイン研究所にねむっていたFACS Caliburをひきずりだし、培養機を立ち上げ(3台中2台は最終的には破棄)、私に来てからなのか壊れるオートクレーブを何度も修理してもらおうといった途方もない作業から開始することとなりました。おかげで機械にはかなり詳しくなりました(笑)。現在では姉妹病院であるGuy's Hospital(連絡バスで7分)のFACS CantoやFACS Ariaも使用してマルチカラーでの抗リン脂質抗体症候群患者およびSLE患者の単球を検査しております。単球は血栓にも関連があり、抗リン脂質抗体症候群でもその細胞内シグナルが注目されている分野です。現在は研究も軌道にのっておりますので、楽しく研究生活を送らせていただいております。



最後に、ロンドンに来て早々子供を授かりたくさんの方々に助けをいただき無事平成22年7月に、私の所属する病院で長女が生まれるというおまけもありました。そこでも目いっぱいNHSを利用しましたので、そちらの状況についてもお話ししたいと思います。まずNHSシステムはこの国の方でも6カ月以上滞在する場合はNHSを利用することが可能です(欧州人は期間に関係なくいつでも使用可)。一度登録すれば診察はすべて無料です。妊娠がわかるともちろん診察台は無料ですが、さらに薬剤も無料になります。これは他の疾患にかかっているとその薬も無料になります。といってもこちらの薬剤はとてつもなく安いので(たとえばNSAIDsでも数百円単位)やり過ぎのような気がします。というのも英国は家計に対する自己負担率は世界で最も低い国となっていることで有名ですから。

ただ、お金に余裕がある方はプライベート病院に行きます。子宮筋腫などの手術はNHSでは6カ月待ちなどとなっていますので痛みがひどい様な方はプライベートに行かざるを得ないという矛盾もあります。日本人専門のクリニックもあり日本の海外保険に入っていればこれらも全て無料になります。私は日本の健康保険、NHS、海外保険すべてに入っていたので、すべて利用可能でした。妊娠管理関係は海外保険に認められませんでしたのでNHSを受診し、その他の風邪などはその日系の病院を受診しました。NHSでは妊娠管理は妊娠がわかるとまずGPに行くことになっております。GPに行きますとナーズが再度検査薬でチェックし今後の予定を淡々と知らされます。最初の超音波エコーは12週ですが心配でしたので、早くに一度エコーを受けたい旨伝え、直接病院について話してみようとのことでしたのでさっそく土曜日(エコーは土曜日にもやっていたので)に訪れて手紙も持たずにエコーしてもらいました。もちろんこれも無料でした。その後12週、20週とエコーは決まっているのですが、私達は7回も検査してもらいました(心配というよりも日本のスタンダードに合わせてみたのと子供の記念写真)。このようにNHSも言えば柔軟に答えてくれます。逆に医学的知識がないと大変な事態になることもあるので注意が必要です。12週のエコーのときにMid wife(助産婦)に初めて会い、いろいろと授業があるから好きなものを受けなさいとのことですので、父親教室や出産の基本的な勉強、施設見学(当初水中分娩なども希望)などを選択しました。

これらもすべて無料ですが、かなり英国訛りが強い講師のときは全くわかりません。しかし、職場から数分で行けましたので実験をしながらこれらの授業を聞くこともできました。産科の医師にあったのは出産前に一度、陣痛が始まってすこし問題があった時にちらっときただけの二回ほどでした。それ以外はほぼMid wifeが対応してくれて、なにかあったらすぐにMid wifeに電話という日が続きます。日本の産科領域の医師不足は深刻ですがこのようにMid wifeが活躍している様をみると、これをモデルに日本でも変革できるのではないのでしょうか。陣痛が始まると陣痛から分娩まで一つの個室で過ごすことができ、Mid wifeがつきっきりでICUのように24時間管理してくれます。無事出産が終わると多くの英国女性はその日に帰宅する方が多いようです。文化の違いなのか体が丈夫なのか。私達は一泊させてもらいましたが、延長希望をすればいくらでもいれそうでした。少しの時間だけですが最後には無痛分娩も選択しましたがそれもすべて無料でした。出産後はすぐにMid wifeが家まで来てくれます。少し日時がずれたりしましたが、まあ、日数通り来ていただき、保険師さんにバトンタッチ。子供の登録の仕方やら予防接種やらのちょっとした説明をして頂きさっそく登録しようとしたのですが、これがまた1カ月待ち!こちらでは当たり前の現象です。一ヶ月後に近くの管轄地区の役所に名前を登録し、日本大使館にその証明書をもって名前の漢字を決定し、2週間で戸籍に載りました。日本から戸籍をおくってもらい、最終的にパスポート発給まで3カ月かかりました。すべてがのんびりというのも英国らしいといえば英国らしいエピソードでした。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えて下さいました小池隆夫教授を始め、第二内科同門の諸先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。また今後も多くの若い先生方が留学して たくさんのことを学んでくれればと切に思いますので何かお手伝いできることがあればいつでも連絡をください。最後まで読んでいただきありがとうございました。